

河岸端通りの賑わいと変遷

江戸時代から河岸端通りと言われている通り道は、お旅祭りや西瓜祭りで菟橋神社から本蓮寺までの道路の両側に多数の露店が並び大変な賑わいを見せている。明治、大正、昭和、平成時代を通して、小松の旧市街地で最も時代の変遷を受けている地域である。

京町交差点の旧小松郵便局前広場（九竜橋付近）は、藩政時代には「札の辻」といい、幕府（藩も含む）の法令が高札として建てられていた。明治二十年（一八八七）頃までは、宿駅小松の中心として、多数の旅館が軒を並べ、その繁栄は北陸本線の開通まで続いていた。

った。



小松細見之図(金沢市立玉川図書館所蔵)「河岸端ト云此筋惣名也」と記されている

太平洋戦争後にかけて生活必需品が切符配給制になり、品物不足の中で河岸端通りでは次々と店が開かれた。昭和三十年代には、河岸端通りの両側には、旧小松郵便局、北陸銀行小松支店、犬丸屋魚店、マルホ薬局など商店や住宅が約九五軒あ



小松町九竜橋詰(小松市立図書館所蔵) この橋の付近は、北陸本線の開通まで宿駅小松の中心として栄えた。左側に高札を掲げた高札場、その手前に里程元標がある。(明治前・中期)

昭和四十年代 昭和四十四年（一九六九）、小松空港への車の渋滞を緩和するため、本蓮寺から北陸本線と立体交差（陸橋）して新国道八号（現・国道三〇五）に結ぶ道路が完成した。その結果、小松郵便局をはじめ官公庁等が新国道八号筋に転出した。都市街路拡幅に伴う河岸端通り商店街整備事業として、昭和四十六年三月、旧小松郵便局跡地に鉄筋三階建ての共同ビル「京ビル」、昭和四十七年五月、「京ビル」と交差点をはさんで向き合うよう



戦後品不足の中で店を開く河岸端通り 本蓮寺より西を望む（小松市制50周年記念誌より）



京ビル、河岸端ビルが開店し、河岸端通りの近代化が進む（昭和47年）（小松市制50周年記念誌より）

に「河岸端ビル」が完成した。橋北地区の中核店舗として近代化が進められ、買い物客で賑わっていた。

平成時代 平成元年（一九八九）から空港軽海線（浜田町～細工町）の四車線化の整備工事により「京ビル」、「河岸端ビル」、商店や住宅などが立ちのき、九竜橋川右岸の建造物は撤去され、昔の景観が一変した。工事着工から約二〇年経過し、全線供用がまたれる。空港軽海線は、西側は小松空港や北陸

自動車道小松インターチェンジ（IC）付近まで伸び、東側は国道八号、加賀産業開発道路などをつないでいる。JR小松駅、市役所付近を通り、小松の玄関口に位置づけられる重要な幹線道路で、四車線化により中心市街地の東西方向の混雑が解消され、小松市街地の交流が活発化されることが期待される。また、歩道やロードパークの整備により、安全で快適なまちづくりをめざしている。（橋本正準）



平成14年（2002）に取り壊された陸橋から続く露天商と子供獅子の行列